

コミックをアーカイブすること

文化遺産の保存か、コミック研究の視野の拡大か？

ケース・リベンス

訳 竹内美帆

2014年1月、よく知られているベルギーのコミック・キャラクター、タンタンは、生誕85周年を迎えた。まさに85年前、『20世紀子ども新聞 (Le Petit Vingtième、ル・プティ・ヴァンティエム)』誌における第1回目のエピソード(「タンタン、ソビエトへ」、1929年)において、彼はソビエト連邦へ向かう途中のベルリン行きの電車で初めて登場したのであった。それは、すぐに多くの読者を強く魅了することになる彼の未来の冒険の始まりだった。タンタンは、その日様々なソーシャル・メディアにおいて、世界中のファンと読者から祝福された。その一人であるカナダ人のアンドレー・ガロー氏は、自身のツイッターで、誕生日のお祝いと共に簡単な質問をつぶやいた。「タンタン、お誕生日おめでとう! ちなみに、コミック・アーカイブというものは存在しているのでしょうか?」

この論文はガロー氏個人の生活や活動に焦点を当てるものではないが、モントリオールの主要な大学の一つであるケベック大学の史料館の館長であるガロー氏は、ケベック州アーカイブ員協会の会長を務めている。言い換えれば、彼は、アカデミックな訓練を受け、偉大な大学の責任ある地位において、専門職員である同僚の見本となる立派なリーダーとして働いている。しかし、彼はコミック・アーカイブの存在自体について知らないようだ。すべての研究者は知識の限界を持っているので、このアーキビストを非難すべきではない。しかし、ガロー氏のツイートは様々なことを示唆する。一般的なコミック・アーカイブについての認識は限られていること、そしてそれはカナダだけに当てはまらないということ。遺産保全、アーカイブ、図書館の関係者はコミックの事情についてあまり知識がないということ。ポピュラーカルチャーは科学やアーカイブ、図書館において確かな公認を得てきたかもしれないが、アカデミックな世界でのポピュラーカルチャーの公認は必ずしもコミックへの配慮につながらない。また、「コミック=移ろいやすい、非耐久的、短命なもの」と「アーカイブ=連続性・永遠なもの」とのしっかりとした橋渡しが出来ているわけでもない。

しかし、ガロー氏のツイートは以下のことを示す。

(1) 実際に、フランス語を話すカナダ人はベルギーのコミックを読んでおり、このケースはフランス語圏に限られているものの、コミックは文化横断的現象であると考えられる。

(2) コミックは子供向けだけではなく大人の読者にも受け入れられている。

1 @Andre_Gareau, “Des archives de bandes dessinées, ça existe ? Bon 85e anniversaire Tintin !” https://twitter.com/Andre_Gareau/status/421062677365280768. 2014年1月8日、ツイート(最終閲覧:2015年12月20日)

(3) 何十年にもわたって読者をひきつけるコミックがあり、コミックは「記憶のないメディア（移ろいやすいもの）」ではない。

コミックは、公認されている越境的＝文化横断的メディアである。しかし、同時にそのアーカイブとの関係は多くの人にとって未知の領域である。

コミック・アーカイブは以下の特定の集団にとって特に有用である。

- (1) 原文の出典を求める（特に歴史的関心の高い）コミック研究者。
- (2) 特定のコミックを再版したい専門的な出版社。
- (3) 展覧会を準備する美術館。
- (4) ジャーナリストや批評家、ドキュメンタリー映画作家。
- (5) 時々、ファンも含まれる。彼らは「本物」を観たり触ったりすることで刺激を受ける。数量から見れば小さな集団であるが、より幅広いオーディエンスとの媒介者となる²。

さまざまな努力により、いくつかのコミック・アーカイブのリストが制作されている³。しかし、ここでその全貌を概観したいわけではない。コミックの遺産の保存について数々の機関が集まったことがあるが、その機関の多くはコミック専門ではなく、むしろ図書館や博物館であった。最もよく知られている例として、フランスのアングレーム市にある国際フランス漫画館（CIDBI）が挙げられる。ここで2012年1月に毎年1回行われている国際漫画フェスティバルが開催され、東アジア、北米、西欧、東欧から集まる11の機関とその40の代表が集結した。

この会議では、日本の京都国際マンガミュージアム、北米のビリー・アイアランド・カートゥーン図書博物館、スイスのローザンヌ市立図書館、ストックホルム市立のコミック図書館「セリエテケット」など、よく知られている組織のスタッフも参加した。しかし不幸にも、この会議はコミック研究者から注目を浴びず、幅広い視聴者と認知を得られなかった。冒頭のガロー氏のツイッターの質問に、こう答えることができるかもしれない——カナダ人によるコミックやコミックに関する資料はカナダ国立公文書館のコレクションにあるが、カナダ国立公文書館からこのフランスのイベントへの参加者はいなかった、と。

アングレームの会議で話し合われた一番大きな問題は、デジタル化についてであった。参加したほとんどすべての機関は、そのコレクションの一部である原画や印刷物をデジタル化するプロジェクトを進めていた。デジタル・コピーを制作する理由は、古いコミックを保存するためだけではなく、それをインターネット上で利用しやすくするためでもあった。しかしそこで大きな問題となっているのは、作家や出版社の著作権に関することである。特にこの数十年間、世界的なコミックの遺産を公共物に戻すことは簡単ではない。これらのアーカイブやその他の熱心な機関などが多くの失敗続きの経験を伴ってきたことは疑いようがない。オリジナルの資料にアクセスする社会的な要求が高まっているように思われるが（個人のコレクターに、驚くべき価格で古いコミックや原

2 コミック・アーカイブに関する文献は珍しく、特に国際的な全体像を比較的把握することは難しい。これについて言及している数少ない重要なものの一つに、Weiner 2010 がある。

3 CIDBIはそのウェブサイト上で、コミックについてのミュージアムを概観するのに役立つ情報を提供している。<http://www.citebd.org/spip.php?rubrique34>（最終閲覧:2015年12月20日）

4 以下の3つの報告が参照可能である。Boris Bruckler, Frédéric Sardet. Le réseau de la bande se dessine. Échos d'un symposium patrimonial. *Bulletin des bibliothèques de France*, nr. 3, 2012: <http://bbf.enssib.fr/consulter/bbf-2012-03-0092-006>, <http://www.citebd.org/spip.php?article3673>, Reserapport från Seriefestivalen i Angoulême 25-29 januari 2012: <http://www.biblioteksforeningen.org/wp-content/uploads/2011/01/IngdenRingselle.doc>（最終閲覧:2015年12月20日）

画を売りつけるオークション業者がいることからわかるように)、コミックに関する機関がその資料を公的に可視化し、広く利用しやすいように尽力しようとしているにも関わらず、限られた予算だけではなく法律的な障害にも直面しているのが現状である。

しかしこれらの情勢は、コミック・アーカイブの発展を妨げているというわけでもない。CIBDIのウェブサイトによると、現在、45もの図書館や美術館などのコミック・アーカイブの存在が確認できる。このリストは完全ではない。コミック史料をも収蔵している一般の公立アーカイブは含まれていないし、カリフォルニアのバーバンク市にあるディズニーのような企業のアーカイブも見当たらない。中南米は含まれているが、アフリカとオセアニアは含まれていない。しかし、このようなコミックについてのアーカイブが、コミックを専門に扱う機関（主に美術館やいくつかの図書館）に限られているということもわかる。博物館的機能と図書館的機能、そしてアーカイブ的機能の組み合わせは既に存在しており、その機能の組み合わせは有益な混合体でありうる。ここに挙げられている機関は、コミック研究に欠かせない環境を提供しており、その機関の献身的な努力は評価に値する。しかし、それらの既存の機関がどういう役割を果たしているか、そして果たしうるかを検討することが重要であると考えられる。

コミック・アーカイブは、出版物、原画、原作、表紙イラスト、広告、ポートレイト、往復書簡、インタビュー、日記、など様々なものを保存する。それぞれのアーカイブ・カテゴリには、驚くほどの数の資料があり、そしてほとんどの機関ではその貴重な資料の総量をととも正確に数量化している。そうしたアーカイブ・コレクションにはいくつかの国外の物も含まれているが、たいていその国「独自の」コミック作品に焦点を当てている。この現象についての考察はまた別の機会に譲りたい。しかし、疑問となるのは主として質的な問題である。アーカイブは、コミック研究者にとってどんな意味があるか。コミック史研究とどう関係していくか。コミック史研究の発展にどのように貢献できるのか、という問題である。

本論文では、以下の二点に焦点を当てる。それは、コミック史研究と、その歴史学におけるアーカイブの役割である。これはもしかすると私が過去について扱おうとするように感じられるかもしれないが、そうではない。私は未来を向く必要があると考えている。これは多少、歴史学者にとって普通ではないことだと自覚している。しかし、歴史学的主張は常に過去と向き合いながら複雑な質問をしようとする意図や、知識の蓄積を改良する意図と共に、先行研究を含む現状を査定して作られることを忘れてはいけない。私たち自身の未来に対する方向付けは、SFを作るときと同じではない。内側と外側の世界からの可能な未来への批評を準備するために、どのようにコミックの学知における現在のな実践を改良していくことができるかを見ていく必要がある。

「ザ・コミック史学 (the historiography of comics)」のような言葉は、なんとも居心地の悪さを感じさせる。この居心地の悪さは、「歴史学 (the historiography)」という語の定冠詞つき単数形にも基づいている。ある人が「歴史学」という言葉を使うとき、それは暗黙のうちにまとまったひとつの歴史を指していることが多い。そのような解釈は英語で「コミック (comics)」という語が複数形としてあらわされることが示すように、歴史研究の多様性にもコミックの多様性にも相応しくない。

私たちはコミック研究者として、異なる背景を持って、つまり、異なるディシプリン、国、文化的文脈をもちながら、コミックというメディアをきっかけに集まっている。そのきっかけは、コミックが語る物語やイメージの使用、特定の絵と言語要素の連続的な絡み合い、コミック作家が物語るときのいくぶん文学的、芸術的な方法、ジェンダーや過去について扱うコミッ

5 近年の論考としては次のものもあげられる。Chapman 2011、Michaelis 2008、Sackmann 2014、Smolderen 2014。

クのアプローチについてのトピックスの変化と発展、コミックをのせる媒体（紙かデジタルかその他の手段か）、など多岐にわたる。これらのさまざまな要素は、いくつかの強弱をもってコミック史学に反映されている。

簡単に言えば、私たちは第一に、コミックというメディア自体とコミック作家や原作者といった作り手に魅了されている。それらは当然のことながら、多くのコミック・アーカイブの中心でもある。今では、コミック研究は、私たちの視野の拡大を特徴とする成熟の段階に達している。私たちはもはや個々の作り手を、独特で孤立し、目立つ作家の一種としみなしていないだけでなく、ますます出版社、編集者、そして少なくとも慎重な範囲で経済的な側面への視点を含めた幅広い文脈に位置づける。しかしこれらすべての側面はコミック・アーカイブにしっかりと表現されているのだろうか。それは疑わしい。コミック自体、そしてその制作過程の諸段階による結果は、作家の生活を垣間見せる文章や画像と並んで確かに存在している。しかし、彼らが活動した経済的、社会的な背景は、多くの場合、はるかに少なく記録されている。これは、アーカイブの確かな限界——コミック研究の中にも確実に現れているアプローチを反映するもの——を意味する。そして、それに加えて重要な要素が欠落しているのである。

コミックというメディアそれ自体は、すでに作家主義の視点から取り上げられる時代がもう過ぎている。批評理論は、コミック研究において重要で正当なものとして位置づけられてきた。そして、コミック研究は、視覚表現がいかに意味を作り出すことができるかに対して、批評的な視線をおくるまでに至っている。つまり、視覚表現、言語表現、空間表現などがいかに意味構築に関わっているか、そして、コミックの物語的要素がいかにコミックの他の要素と関わり合い、コミック以外の表現と物語、さらに現実そのものと関わり合うかといった問題である。

実際、私はここで自分自身を十分正確に表現していない。コミックはそれほど意味を作らない、むしろ意味を作るのはユーザーや生産者などの関係者である。コミックは人間のメディアムである。それは大いに個々のストーリーを語り、そして何より社会的なメディアムである。私たちは見たものの意味を理解しようとする読者を前提とし、彼らは作り手と同じではない。

研究者として私たちは定義上読者のカテゴリーに置かれる——私たちの何人かはコミックブック・クリエイターとして振る舞おうとしているにもかかわらず。そして特に記号論、図像学、文学研究を背景とするコミック研究者は、どのようにコミックの構造が作り手によって組織されているかを考えるだけではなく、様々に微妙な関係にあるイメージと言葉の組み合わせがどのような読みをもたらすか、そしてこれが解釈可能性においてどんな効果をもたらすかを考える。研究者自身の読者としての役割は重要だが、欧米のコミック研究においては中心的すぎると言ってもよい。

一般的なコミック研究者は、コミックについての学術的「読書」の現実についてよく知りすぎている。しかしこの特殊なコミック・ユーザーは、多分、典型的なコミック読者ではない。その読者の二つのグループの間に違いがあることは驚くことではないだろうが、私たちはコミックに対するアプローチにおける根本的な違いを軽視しているか、無視さえしているようだ。コミック物語について研究者による「深読み」は、コミックを「遊ぶ」こととはまったく異なる。これは、私たちのコミックへの私的な解釈やストーリーによる効果が、他の読者の経験と異なる、ということを意味するわけではない。しかし前提として、一般読者の読みの経験と専門家のそれが似ているということは言えないだろう。したがって、そうした考えは改める必要がある。

結論として、読みの二つの種類（研究者による「深読み」と一般読者による「遊び」的読み）における差異について、特にコミック史学においてより注目する必要がある。私たちは、特に専門家ではない一般読者や彼／彼女らの経験にもっと注意を向けるべきである。コミックの範囲と効果を理解するために、私たちは発行と再版の部数についてや、受賞歴、専門誌などでの評論を調査する必要がある。経験的な調査に基づき、その多

様性において一般読者の実際の経験をつきとめ分析することを目的とすべきである。ほとんどのコミックに関するアーカイブはこの問題についてあまりに足りないのである。

それと関連する近年の研究動向についてもここで述べておく必要がある。読みの経験についての近年の研究は、人々がどのように「読む」かに限らず（この「読む」という、文章を読む経験に基づく言葉を、きわめて視覚的な性質を持つコミックに適用してよいのかという疑問が残るが）、どうやってストーリーを解釈するか、どんな知識や感情がコミックの読みにおける誘因となるかをも含める。例えば、フィールドリサーチかより隔離された研究室の状況に基づいた、リテラシー運動に対するコミックのインパクトや新しい学習コミックの採用についての調査研究に目を向けることにより、例えば、第二次世界大戦の記憶といったような社会的に繊細な話題についても考えることができる。ところが、このような調査研究の成果は、各研究領域にとどまって、コミック研究者に届かない場合が多い。

千人ではなく数十人しか対象としない小規模な研究が多いが、それらの研究はコミック研究者が抱く「コミック読書」観を広げることに貢献できる。しかし、研究者による「深読み」と、読書の調査研究といった二つのアプローチを絡み合わせるには、両者の様々な方法論的な原則を注意深く組み合わせる必要があり、二つの領域の接続を相互に進める意欲が必要である。とは言え、その成果は実りが非常に多く革新的であるかもしれない。

読者をコミック研究に取り戻すことに関連する次の問題は、上記の二重のアプローチの歴史的範囲である。どうやって私たちはコミック史学において読者の経験を統合できるのか。特に子供のころや青年期の中にコミックを読んでいたたくさんの読者は、もう生きておらず、そして、読んでいる間は観察されることがない。しかし、それは研究者を困らせるわけではない。

(1) まず、近年の読みの実践についての研究は、読みについての歴史の浅いティーンエイジャーやその他の世代に幅広く焦点を当てており、より年齢層の高いグループに広げることが可能である。私たちは彼らが何を読んでいるのか、どうやってそれを読んでいるのかをチェックすることができ、そしてどうやって彼らが自身の読むコミックを選ぶようになったか、どんな文脈を読んでいるのか、この読書経験から何を引き出すのか、という問いを立てることができる。

(2) 私たちは現在の読者、特にその中の大人の読者に、過去に何を読んだことがあるかについての印象と、その中で何が記憶に残っているかについて尋ねることができる。しかし人間の記憶には不足とバイアスがあり、再解釈による影響を受けているため、遡及的なアプローチは避けるべきである。

(3) 私たちは過去のコミック読書の経験について書かれた資料を探す努力をすることができる。コミック雑誌における編集者への読者によるコメントや手紙、ファンジンの投稿、コミック作家への読者からの手紙は注目に値する。たくさんのメディアにおける多少専門的な批評家による評論も加えれば、受け手側を照らし出すことができる。

6 すでに初期のコミック研究における最初の十年間は読者に注意を払っていた。よく知られている例としては Heisler 1947、Wolf and Fiske 1948 が挙げられる。次の数十年間の間に、アカデミックな研究において読者への視点が失われた。20 世紀後半、ファン研究は読者への注目を促したが、それは彼らの読書経験に焦点を当てるものではなかった。例えば、Pustz 1999。その時までには、コミックの読者層を研究するための新しいインスピレーションが、北米の図書館員や語学教師から現れてきた。Ujiié and Krashen 1996、Norton 2003、Crawford 2004、Charbonneau 2005 など。より最近では、大人の読者やコレクターのような特定のコミック読者については、ポトウザキス Botzakis 2006 や Botzakis 2014、Woo 2012 などのように、主に米国で研究されている。全く新しい、しかし論争のあるマンガ読書の特殊な要素を分析する方法は、Cohn 2013 によって紹介された。それは脳波 (EEG) によって経験的データを収集する方法である。

これらのことを踏まえれば、資料についての明白な量的と質的な問題があり、その観察はコミック・アーカイブのコレクションと収集方針に影響するはずである。しかし、多様なコミック・アーカイブにはすでに、例えばコミックブック・ファンのコミュニティーについての重要な情報が含まれているファンジンのコレクションがあるように、十分公認の価値がある。ファン・カルチャーは近年ますます注目を集めてきており、確かに価値がある、しかしそのようなサブカルチャーとそれほど強く同一化する必要がない一般の主流なマンガ読者に関する知識についての適切な資料があるとすれば、それはまだ私たちに課題を残す。

より一般的な読者の経験に関しては、入手可能な資料は全く持って少なく、不完全で、歪められており、頻繁に挫折しそうになるほどであると、定期的に指摘されている。しかし、もし私たちが読者に関する資料をもっと集中的に調査し始めない限り、それは自動的に表にあらわれず、私たちの視野もまったくもって限られたものになりつつけるだろう。もしうまくいけば、いわゆる「エゴ・ドキュメント（個人史）」と言われる、個人の読者が自分のコミック読書の経験について記録したものが見つかるかもしれない。そのような種類の資料によって、私たちのコミック読者層への理解はより先鋭化することができるだろう。そうすることによってのみ、私たちは読者の多様性と発展についてのより良い視点を得ることができ、そして読者自身はどのように作り手およびその文化的な生産物両者に影響を与えてきたか、という根本的な質問をすることができるのである。

一つの重要な側面は、私たちが蓄積する読書経験についての自覚を高めることである。作り手や学術的コミック研究者の視点から見ることに加え、コミック読者の目を通して見る必要がある。研究者自身、部分的に実践主義的で理解しやすい理由のために、通常一つのコミック・ブックや特定のコミック作家のすべての作品に焦点を当て、ある特定のジャンルや言語圏の範囲内で仕事をするのに対して、少なくとも欧米の領域での私の観察に基づけば、一般的なコミック読者は雑食的であるといえる。ある人はアメリカン・スーパーヒーロー・コミックスと同時に最近の日本の少年マンガを読むかもしれない。また、どこの国のものか気付かず言葉のないウェブコミックを読んだ後、翻訳された新しいドイツのグラフィック・ノベルを消費するかもしれない。このような読書経験の多才さは例外的であるように思われるかもしれないが、多くのコミック研究者たちが記述した研究総体に見られるものと比べて、一般的な実生活の中で言語、文化、ジャンルや時代を横断することは、よくあることである。自身の蓄積された読書経験に、異なる起源をもつコミックを融合させる読者は存在し（ここでは便宜上の理由からその他のメディアについての言及を加えることを避けるが）、それは注目に値する。

コミックの歴史は特定の文化的、歴史的環境において発行されることにとどまることはない。翻訳されたり、再出版されたりする形でコミックス史は続いていく。それはコミックを、より広い枠組みと分析の価値があるダイナミックな文化的で歴史的な現象として捉えることである。それは、集合的経験がどのような範囲に存在するか、それはどんなスケールで起こったか、について理解することを可能にする。

結論を述べたい。まず、私は本論文において、現在のコミック・アーカイブが十分に貴重ではない、という印象を作り出したわけでは全くなかったことをご承知おきいただきたい。とりわけ私は、コミック・アーカイブを豊かな情報源とみなしており、(歴史学者だけではない)コミック研究者としての私たちの仕事にとって重要な基盤であるアクセス可能な資源であると考えている。数々の熱心な人々によって作られたアーカイブが、様々な困難に直面しており、それは対応を必要としていると理解している。

コミックは多くの国において繁栄し、豊かな様相を呈しており、非常に多彩なメディアムである。結果として、どんなコミック・アーカイブにおいてもこれまでに収集・保存ができたものより多くの痕跡を残す。さらに、コミックは文化的、芸術的、社会的、歴史的価値を持つもの

みならず商業的価値も持つ。まさに、世間的にポピュラー・カルチャーへの評価が高まり、特にコミックの公認が高まるにつれ、裕福なコミックファンの市場が出現し、彼らの関心は結果的にコミックの遺産の消滅へとつながってしまう（つまり、彼らが所有してしまえば私たちにとって気づかれなくなる）。両方の発展は、コミック・アーカイブのコレクションに影響を与える。より保存が可能でアクセスしやすい利用可能な資料が増える一方、他方でより幅広い視聴者のために確実な資料を選ぶことが難しくなっているというリスクもある。これらの現象は研究者にとって注目に値する。

私は、コミックはダイナミックで幅広い文化的現象であると考えている。これは私たちの視野を広げる必要があることを意味している。しかし、これはコミックに関するすべてのものを保存できるという幻想を私が抱いているということではない。物理的な空間や資金の不足だけでなく、調査する時間は限られている。選択とそれについての反省は不可欠である。

選択の基準を創設することは重要な問題であり、コミック研究者、アーキビスト、図書館司書、ミュージアム学芸員やその他の専門家の協力と参加が必要である。これは開かれた議論を要求し、そこで私たちは自分たちの現在の研究の状況（将来的な研究について考慮することも含めて）についての視点から可能な限りはっきりと説明し、可能な限りコミックの過去へアクセスできる状態を維持していくことが不可欠である。

さらに、コミック・アーカイブのコレクションの多様性に一定の注意を払うことは重要であり、それはまさにアーカイブは、コミック研究とより一般的なコミックとコミック史についての反省の両方にとって欠くことのできない役割を持っているからである。過去の私たちの視点は選択的で限られたものであるしかなく、しかし私たちのアーカイビングと研究における選択性については、つねに収集方針を守ることと、熟考されていない近視眼的な間違いを繰り返す可能性に抵抗する理解を考え直す必要がある。

歴史学者として、真正性の意味を認めているが、その価値は絶対視されすぎている。つまり、情報の価値は必ずしも物のオリジナリティによるわけではない。もともとの原作などの史料に接触する可能性を維持していくことは重要である。同時に、実践的であることも必要である。もし幅広いスケールでのデジタル化の利用可能な方法を発見し、その結果をできるだけ多く明らかにすることができれば、多くの研究課題は身体的にアーカイブ機関に出向くことなくデジタル・コピーを利用して答えることができるようになるだろう。さらに、コミックの遺産が限られた数の専門的アーカイブの外側にも存在していることを考慮すべきである。

これは、政府のアーカイブにおける幅広いコレクションから、高い関心を持つファンのボランティア・グループによるウェブ上でのスキャンされたコミックの出版や公開（時に翻訳さえする）まで、多岐にわたる。様々な団体とのより構造的な協力は、自国の国境を越えてさらに深めていく必要がある。非常に重要な遺産に対する出来る限り最高の選択と利用しやすさを考えようとするのと同じことが、コミック研究者にも当てはまる。コミック研究は隔離されてはいないが、芸術学や映画、テレビ、文学研究、メディア研究やカルチュラル・スタディーズなどの隣接分野の専門知識を十分使っているわけではなく、コミック・アーカイブについても機会があればもっと使うべきである。

7 近年のオークションにかけられた貴重なコミックや原画の事例については、以下の記事から見る事が出来る。Ed Mazza, 'Action Comics' No. 1, First Superman Appearance, Sells For \$3.2 Million In eBay Auction, *The Huffington Post*, 25 August 2014, http://www.huffingtonpost.com/2014/08/25/action-comics-superman-ebay_n_5707081.html, Christie's Tintin Sale, 14 March 2015, <http://www.christies.com/Tintin-25890.aspx>, (最終閲覧 :2015年12月20日)

参考文献

Botzakis, Stergios,

——2006. *Reading when they don't have to: Insights form adult comic book readers*, Doctoral Dissertation, Athens GA.

——2014. “Graphic Novels: Who Likes Them and Why,” *Adolescent Literacy In Perspective*, February, pp.6-7 (<http://www.ohiorc.org/adlit/>).

Chapman, James, *British Comics. A Cultural history*, Reaktion Books, 2011.

Charbonneau, Olivier, Adult Graphic Novels Readers: A Survey in a Montréal Library, *Young Adult Library Services*, Vol.3 Nr.4 (Summer 2005), pp.39-42.

Cohn, Neil, *The Visual Language of Comics: Introduction to the Structure and Cognition of Visual Images*, London: Bloomsbury, 2013.

Crawford, Philip, A Novel Approach: Using Graphic Novels to Attract Reluctant Readers and Promote Literacy, *Library Media Connection*, Vol.2 No.5 (February 2004), pp.26-28.

Heisler, Florence, A Comparison of Comic Book and Non-Comic Book Readers of the Elementary School, *The Journal of Educational Research*, Vol. 40 No.6 (February 1947) pp.458-464.

Michaelis, David, *Schulz and Peanuts: A Biography*, HarperCollins, 2008.

Norton, Bonny, The motivating power of comic books: Insights from Archie comic readers, *The Reading Teacher*, Vol. 57 Nr. 2, (October 2003), pp.140-147.

Pustz, Matthew, *Comic Book Culture: Fanboys and True Believers*, Jackson: University Press of Mississippi, 1999.

Sackmann, Eckart, *Jahrbuch deutsche Comicforschung 2015*, Sackmann und Hörndl, 2014.

Smolderen, Thierry, *The Origins of Comics: From William Hogarth to Winsor McCay*, University Press of Mississippi, 2014.

Ujiie, Joanne, and Stephen D. Krashen, “Comic Book Reading, Reading Enjoyment, and Pleasure Reading Among Middle Class and Chapter 1 Middle School Students,” *Reading Improvement*, Vol. 33 No.1 (Spring 1996), pp. 51-54.

Weiner, Robert G., *Graphic Novels and Comics in Libraries and Archives: Essays on Readers, Research, History and Cataloging*, Jefferson, NC: McFarland, 2010.

Wolf, Katherine M., and Marjorie Fiske, The Children talk about Comics, in Paul F. Lazarsfeld and Frank N. Stanton, eds., *Communications Research 1948–1949*, New York: Harper & Brothers, 1948, pp.3-50.

Woo, Benjamin, Understanding understandings of comics: Reading and collecting as media-oriented practices, *Participations. Journal of Audience & Reception Studies*, Vol.9 No.2 (November 2012), pp.180-199.